

スクールバスで通学

小峯地区の小学生児童たちは、スクールバスで広安西小学校に通っています。毎朝3本のスクールバスが時間差で運行しており、下校時は学年ごとに時間が変わります。「ワンピースのラッピングスクールバスで、みんなと一緒に通えるのがうれしいです」と話すのは井上愛恋奈さん(12)です。

吹奏楽部に入っている那須煌晟く



友愛団地公園で遊んでいた子どもたち。左から那須くん、那須くんの妹の日葵ちゃん(5)、弟の翔景くん(9)、井上さん

ん(11)は「楽器を演奏するのが好きです。部活が終わったら両親が車で迎えに来てくれます」と話してくれました。

地区の子どもたちは中学生になると自転車通学をします。通学路は距離があり交通量も多いため、子どもたちが安心して登校できるように、私たちドライバーも細心の注意を払って見守りましょう。

慈愛の精神とその歴史

終戦後の昭和23(1948)年に創立された児童養護施設「広安愛児園」。ここはかつて陸軍の演習場でした。戦後、アメリカ人宣教師のモード・パラウス女史が多くの戦争孤児を引き取り、この場所にトラック小屋を建てて生活したことに始まります。



パパと公園の遊具で楽しむ後藤凜ちゃん(1)

広安愛児園の創設者でアメリカ人宣教師のモード・パラウス女史



社会福祉法人キリスト教児童福祉会が運営する同園は、今年で74周年を迎えます。ここには、事情があり親と暮らせなくなった子どもや、養護を必要とする子どもたちが生活し、多くの卒園生が飛び立ちました。

「同園では『神の家族、共に生きる、役に立つ心豊かな人』を生活の目標にしています。9人きょうだいで育ったことに良い影響を受けたモード・パラウス女史の体験を元に、各ホームでは2歳から18歳まで縦割りに組まれた年齢の子どもたちが生活しています」と三嶋充裕園長(59)。

毎年、4月29日の創立記念日には卒園生たちがここに帰ってきます。「礼拝や卒園生の集いなどが行われ、県内外から駆け付けた卒園生たちが再会を喜び合います」と園長はうれしそうに話します。



美しい芝生が広がる敷地に点在する各ホーム



話を聞かせてくれた広安愛児園の三嶋園長



愛児園のシンボルツリーのモミの木